

北山村

山に生まれ、水でつながる

KITAYAMAMURA



村章

制定/昭和44年9月30日

「北」の文字を図案化して「山」形を構成し、北山村を端的に表明するとともに、村民相互の友愛と協力の意欲、さらに光栄と発展を表現している。

全国唯一の 飛び地の村 北山村

この地を紹介するには、木と水が欠かせません。

林業が主幹産業として栄え、

その輸送手段として

激流を下る筏師の技が磨かれました。

現代はその筏が観光の主役として村を支え、

新たな雇用を生み出しています。

さあ、次のページを開いてください。

心豊かに暮らす人々と北山村を

紹介していきます。

【沿革】

明治4年 廃藩置県が実施され、新宮が和歌山県に編入された際、地理的に言えば奈良県に属するところを新宮木材業者と共存共栄の関係であったことから村民の意見を聞き入れ、和歌山県に編入された。明治22年七色、竹原、大沼、下尾井、小松の5つの村が合併し北山村と改称施行された。全国唯一の飛び地の村。

【位置】

紀伊半島の中央部に位置し、南は三重県、北は奈良県に囲まれた東西20km、南北8kmの小さな村。

【気候】

温暖多雨で年平均気温が15.2度。寒暖の差が大きい。

【アクセス】

電車・バスを利用の場合

- 新大阪から
紀勢本線(約4時間)特急→新宮駅
紀勢本線(約30分)各駅列車→熊野市
北山村村営バス(60分)→北山村

- 名古屋から
紀勢本線(約3時間)特急→熊野市
北山村村営バス(60分)

車を利用の場合

- 大阪から
南阪奈道路→大和高田バイパス(橿原)→
R169→北山村
- 名古屋方面から
東名阪自動車道→伊勢自動車道→
勢和多気I.C→尾鷲北I.C→R42号→
R309号→R169号→北山村



村の花
「石南花(シャクナゲ)」



村の木
「じゃばら」

【目次】

北山村概要・目次	1-2
観光筏下り	3-4
平成の筏師	5-6
観光	7-8
産業 じゃばら	9-10
じゃばら加工品	11-12
村長インタビュー	13-14
教育	15-16
林業	17-18
福祉	19-20
防災	21
行政	22
北山村の四季	23-24
ごあいさつ	25
イラストマップ	26

日本有数の多雨地帯である大台ヶ原を源流域とし、上流部は吉野熊野国立公園の一部となっている北山川は、豪雨と急流により削られた深い渓谷が続く一級河川。奈良県、三重県、北山村を抜け新宮市で熊野川と合流し熊野灘に注ぐ。

筏流しが 観光筏下りに なるまで

川の中に道をつくり、
岩をすり抜け、
見事な権さばきを
みせる筏師。
600年の北山の技を
今も繋ぐ。

観光

北山村の筏流しの歴史は約600年前に遡ります。文献として残っている「北山由緒記」によると「慶長元年（1596年）7月に京都地方を襲った大地震の中、北山産の木材を使った伏見城の一部は微動だにしなかった。これを喜んだ豊臣秀吉は、村に「北山郷御材木所」の朱印状を交付した」とあります。さらに慶長9年（1605年）、徳川家康が江戸城本丸を建てた時やはり北山村を使ったと記されています。これらの材木を新宮まで運んだのが北山村の筏師なのです。ダムができるまでの北山川は鋭角にむき出した岩や激流、荒滝の連続。戦後復興で材木の需要がピークを迎える昭和30年代には、50メートルから60メートルの長さの筏を流したのです。（卓越した技術は日本一といわれ、明治時代には日本企業が開発を進める満州や朝鮮半島にまで、その技術をかわれ大沼地区の筏師が何回も行ったと記録が残されています）季節や天候によってその姿を変える北山川の流れを瞬時に読み取り判断して権をさばく筏師は、多い時には500人も人がおり北山村を支えていました。筏師は筏に乗るだけではありません。3年間の修行時に木の種類によって筏の組み方を覚えます。夏の渇水時には岩に乗り上げた筏をばらし、ま

た組み直すという作業もあるので。昭和40年のダム建設と道路の改良もすすみ材木の運搬が陸路に変わる時代とともに、筏師の仕事も終わりの時を迎えます。しかし、北山筏の技術を絶やすわけにはいかない。また、林業自体が衰退していく中、これからの村を支える産業を作らなければいけないと、筏の技術を観光資源に変える取り組みが昭和52年から始まりました。筏に観光客を乗せるのは危険だと、許可がおりるどころか中止せよという連絡がくるほど困難な道のでした。やがて観光筏を小型船舶とする登録作業やダムの放水を二定にすると同時に多くの岩を発破で動かして安全な水路を作るなどしました。さらには船の規則にはまるように筏の設計を変えたのもかつての筏師達です。やがて昭和54年に「観光筏下り」がスタートしました。権を使う筏を操るのは日本全国でも、ここ北山村だけ。山と川を財産とし、大自然の営みとともに村を支えた筏の伝統技術は、観光客の安全を第一にした観光筏下りとして北山村を代表する観光資源となつて継承されています。平成26年2月に村の無形文化財に登録された後、平成29年和歌山県民俗無形文化財に登録されました。



涼を求めて北山の水とあそぶ

平成の筏師

先人たちの努力と熱意で昭和54年にスタートした「観光筏下り」は、5月～9月までの5ヶ月間、1日2便の期間限定のものです。材木の輸送手段として600年の歴史ある筏流しが、今では村を代表する観光資源となり日本全国から多くの観光客が訪れるようになりました。現在15人の筏師さんはUターンやIターンの方がほとんどで、かつての筏師さんから直々に指導を受けています。リーダーの山本正幸さんは「筏に乗れるようになるまで3年はかかります。こういう時はこうしなさいといったマニュアルのようなものはないんです。体が覚えていくもので、職人と同じです。山に暮らし、川に生きて

かつての筏師達の伝統技術を私達は絶やすことなく繋いでいきたいと思っています。それが観光客のみならず、喜んでもらえるなら、こんなにありがたい仕事はないです」川の道は「定ではなく、大雨の後には石や岩の位置も変わります。アップダウンあり、水しぶきをかぶったり膝まで水に浸かったり。やがておだやかな流れの中、すがすがしい風や木々の匂い、鳥のさえずりなど奥熊野ならではの空間にすっぽりと身を置くことができます。「観光筏下り」の魅力です。「終点に着いた時、お客様から拍手をいただくことがあります。景色がすばらしい、日本ではないみたい、ありがたい、また来ます、など声を



かけていただくと本当に嬉しいですね」北山村の観光PRのために各地イベントにも筏師自ら出かけることもあります。「この北山村を知らない人もまだまだ多いのが現状です。知名度をさらにアップしたいですし、私達自身もつと筏の技術とともにおもてなしの気持ちを磨いていきたいです」観光を柱とする北山村を支えているのは一人ひとりの住民。今後とも後継者を育成するため全国に筏師候補者を募り、公営住宅の建設など定住の促進に取り組んでいきます。



北山な村人

山本 正幸 さん

現在、20歳代～40歳代の筏師達のリーダーを務める山本さんは、シーズン中は筏に乗り、シーズンオフには北山村の知名度を上げるためにさまざまなイベントにも出ています。またIターンの人達には仕事だけでなく生活全般の相談にも「筏の技術とともに北山村の暮らしも一緒に伝えていきたい」と話す頼もしい存在です。



自然に恵まれた 観光の村

山と川を
そのまま生かした
レジャーを体験
自然の中にすつぽりと
包まれる心地よさは
北山村だけのもの



豊かな自然を満喫するレジャーが北山村にはたくさんあります。季節ごとに表情を変える山や川。人工的なレジャー施設ではなく「自然とともに過ごす」が北山流です。
まずは「ラフティング」。経験豊富なプロガイドと力を合わせて、岩の間をすり抜け激流を漕ぎ下るスポーッと、一度体験するとやみつきになる楽しさ。スリルと迫力、冒険心が存分に満たされます。
おくとり公園内にはオートキャンプ場やバンガロー、テニスコート、焼肉ハウスなどが完備。テントを張ってキャンプを楽しむ方や、温泉施設内に宿泊される方など楽しみ方は色々。
また、小森ダムではブラックバス釣りも楽しめます。すぐそばには「おくとり温泉」があり、ダム湖を眺めながらゆったりと温泉を堪能することができます。

筏師の道ウォーキング

かつて北山川から熊野川を下って新宮まで木材を運んだ筏師達が北山村へ帰る方法といえば徒歩しかありませんでした。櫂や棹をかつぎ、険しい山道を歩いて家族のもとにもどったのです。「筏師の道」として残されているそのルートが「筏師の道ウォーク」として年々、人気が高まってきています。現在の筏師が案内する「筏師の道」。歴史とロマンが感じられ、新しい観光資源になっています。



邪を払う「じゃばら」は北山村だけの特産品

邪気を払うほど

酸っぱいことから名付けられた

「じゃばら」は北山村だけに

自生していた「香酸柑橘」です。

柚子よりも果汁が豊富で種もなく、

地元では縁起物として

昔からお正月の料理に

欠かせないものでした。



「花粉症の症状が軽くなる」といった声がひろがり、あつと言う間に全国にその名を知られることになった「じゃばら」は北山村の特産品。そもそも、じゃばらは二人の村民の庭に1本だけ自生していたのが始まりでした。

福田国三さんの敷地内に「へんなみかん」が育つ木が1本ありました。福田さんは「みかんじゃないけど、独特の味と香りで美味しい。これを増やせないか」と動き出しました。当時は誰も注目しなかったのですが、昭和46年の秋、みかんの分野で有名な田中論一郎博士に調査を依頼。翌年に「じゃばらは国内はもとより世界に類のない全く新しい品種」であることが判明したのです。さらに成分の分析や特性調査な

どを行い大きな期待がもてるものだとわかったのです。村は農園を作りじゃばら栽培に力をいれていくことになるのです。

現在では7haの農園(村営3.5ha、民営3.5ha)が山の麓にひろがり、村の大きな収入源にまでなりました。そもそも「じゃばら」とは柚子やダイダイ、カボスの仲間柑橘類で、柚子よりも果汁が豊富なうえ独特の風味が特徴。10月から12月にかけて収穫されます。官民一体となつて商品開発をおこない加工場ではさまざまな食品が誕生しています。やがて、「花粉症の症状が軽くなった」という声ひろがり、各メディアにも取り上げられ、じゃばらが売り切れるということになるほ



ど爆発的なヒットになりました。じゃばら農園の責任者の宇城公揮さんは春から夏の間は役師として観光筏に乗っています。「毎日の水やりの他、除草剤を使わないので草刈や剪定、堆肥をまいたり毎日大変ですが手間をかけるほど、いいじゃばらが実ります。」種がないじゃばらは接木で育てていきます。実がなるまでには約5年かかるので、成長をじっくり見守っていくことが大切とも言います。様々な年代の人が働く農園は明るい笑い声が絶えません。

産業

北山な村人



じゃばら農園
責任者 宇城 公揮 さん

名古屋で美容師をしていた宇城さんが北山村で働きだしたのが平成19年。夏の間は筏師がメインでシーズンオフはじゃばら農園の責任者として多忙な毎日をおくっています。「みんなで丹精込めてつくるじゃばらを使ったポン酢「じゃぼん」はどこのポン酢よりもおいしい!」自信に満ちた力強い言葉がかえってきました。

酸っぱくて、美味しくて、 くせになる、じゃばら商品

ドリンク、ほん酢、ジャム、マーメイドをはじめ飴やお菓子、
アロマや石けんなどじゃばら商品が登場しています。



近年、じゃばらには花粉症の症状を抑える効果があるといわれており、全国各地からの問い合わせが急増しています。

秋の収穫後は、さまざまな おいしい商品をお届けします

村の特産品となった「じゃばら」は多くの雇用もみだりました。収穫後のじゃばらをドリンクやジャムなどに加工する工場ができ、それを通信販売するためのインターネット事業もさらに活発になっていきました。もともと生産をスタートさせて順調に販売できたのではありません。村内の販売と周辺市町村への卸をメインとしてきた頃は在庫が積まれた時期もありました。交通の不便さとPR不足が原因です。これらを解消するために直接販売ができるインターネットショッピングモールへの参画をはじめました。花粉症モニターをはじめ、ネットでの売上げが急激に増加。加工工場もフル稼働することに



北山村青年会は、村のPRとじゃばらのさらなる認知のためイメージキャラクター「ジャバライダー」を誕生させました。じゃばら収穫祭をはじめ県内外のさまざまなイベントに参加して広報活動に取り組んでいます。

なっていたのです。官民一体となって新商品の開発をすすめ、数多くの商品ができました。また、早くから栽培から販売までの6次産業を成功できたのも村が主体となっていて取り組んだことが大きいといわれています。農園から消費者の手元まで一貫してお届けできることが強みです。



毎年11月には収穫祭が開催されます。県内外からたくさんの出店もあり村全体で豊作をお祝いする祭りです。



じゃばらジャム

パンにつけても紅茶に入れても美味しいじゃばらのジャム。毎日の朝食におすすめの人気商品。



じゃばらマーメイド

じゃばらの果皮の香りとほろ苦い味わいが楽しめます。ヨーグルトに入れても合います。



じゃばら10%ドリンク

じゃばら果汁10%のストレートドリンク。ほどよい酸味と旨みが人気です。



じゃばら果汁

苦くて旨いと人気のじゃばら果汁100%のストレート果汁。いろんな料理に使えるうえに焼酎にもぴったり。



じゃばらポン酢じゃぼん

じゃばらだけの風味にこだわり、1本1本手作りで仕上げました。コクと旨みが効いています。

グローバル社会に対応できる子ども達を育てる

小・中一貫の カリキュラムを 実践



教育



マラソン大会は地域の人総出で応援します。
地域の皆さんに見守られながらの学校生活です。



移動水族館や演劇体験など、幅広い体験ができるよう授業にも工夫があふれています。



運動会は保育園、小学校、中学校、地域の人総参加で行われる一大行事です。



人数が少ないので先生の目がよく行き届きます

北山村が最も力を注いでいるのが「教育」です。村の宝物である子ども達に小さな村だから、とか僻地だからといったマイナス面を感じさせない教育を存分に受けてもらいたいというのが村民の願いです。安心して子どもを産み育ててもらうために保育料は無料にしています。隣には福祉センター、診療所があることから、ヘルパーさんと一緒にお年寄りが増えて、園内で元気いっぱい遊ぶ園児たちとコミュニケーションをとるように自然となりました。これらのソフト面の充実さから県境を越えて三重県から北山村の保育園に通う子どももいるほどです。

小中一貫教育は 心も育てる教育

小学校と中学校がひとつの敷地内にあり、小中連携教育の取り組みをしています。9年間を見通した教育活動が実現でき、21年度からは教職員も合同になりました。小中合同研究授業、中学生が調べた内容を小学生に発表するなど、



フロリダ州にホームステイに行きました。

コミュニケーションも活発です。さらに語学教育の充実のため、村では21年度より単独でALTを雇用し、保育園から中学校まで各学年で週2〜3時間の外国語活動にも取り組んでいます。貫いたカリキュラムを研究しながら、これからの国際化社会に対応できる人材の育成に努めています。国際理解教育の一環として中学生は海外語学研修に参加します。これまでロンドン、アイルランド、シンガポールなどへ行き現地の人達に積極的に話しかけるなどしています。また他校との交流学习も積極的に取り入れています。近隣市町村の学校とは長年の交流を続けており、卓球部の練習試合や授業や学校行事の参加など行っています。



充実した 福祉サービスで 安心な暮らし



高齢化率が48%と約2人に1人がお年寄りの北山村。若者の定住率が下がる一方この数字を支えているのが、行政の力はもちろん地域みんなでお互いを支え合う相互扶助の精神が大きな支えとなつていきます。その根拠を示すものとして「孤独死」という言葉がありません。お年寄りにとって地域の子どもや日々のお付き合いが何よりの心の支えとなつていきます。

える生活でお年寄りの生きる活力にもつながっています。また独居生活の方には安価でかつ便利に活用できる自家用有償運送などを活用し、今後もNPOと連携した過疎地有償運送などを取り入れ、さらに介護予防や健康管理を推進し、福祉医療事業等の現サービス水準を低下させないように取り組んでいきます。よりよいサービスだけが最後の生活を充実させるものとは限りません。北山村の四季折々に美しさを見せてくれる自然、その自然の恵みを受けて体を流れる空気がどんなサービスよりも人のこころを癒しています。





北山村にとって過疎化・高齢化対策、観光振興、道路整備は長年の課題となっておりますが、村民の代表である6名の議員により、年4回の定例議会と必要に応じて臨時議会を開くなどして着実に施策方針を実行しています。

小さな村だからこそその特性を住みやすさにするため、子育てのしやすい環境、介護予防や健康管理を推進するとともにライフラインの整備もすすめられています。同時に災害・緊急時の周辺市町村との連携を強化するとともに自主防災活動や災害を想定した訓練の推進など、村民の安全と、安心

村の発展と 住民の暮らしを 豊かにするために

できる暮らしのために活発な審議が展開されています。また、高速道路の開通により東海方面からの観光客増加を見込んでのさまざまな取り組みと観光施策を検討しています。



万が一のために、 村民の安心と 安全のために

近年、大規模な自然災害が全国的に増えています。県内でも台風の被害が山間部を襲うという悲しい現実もあり、村としても住民の命と財産を守るためあらゆる取り組みをしています。自主防災活動の強化と防災訓練の実施の他、防災拠点の整備と新設、さらには万一の災害時の近隣市町村との連携などに重点をおいています。特に土砂災害に対する備えは最重要項目として取り組んでいます。





おくとり公園の桜。春にはお弁当を広げる家族連れで賑わいます。



秋早朝の北山の山々。山の間を泳ぐように霧が流れます。



冬の小森ダム湖の夜景



冬の小森ダム湖



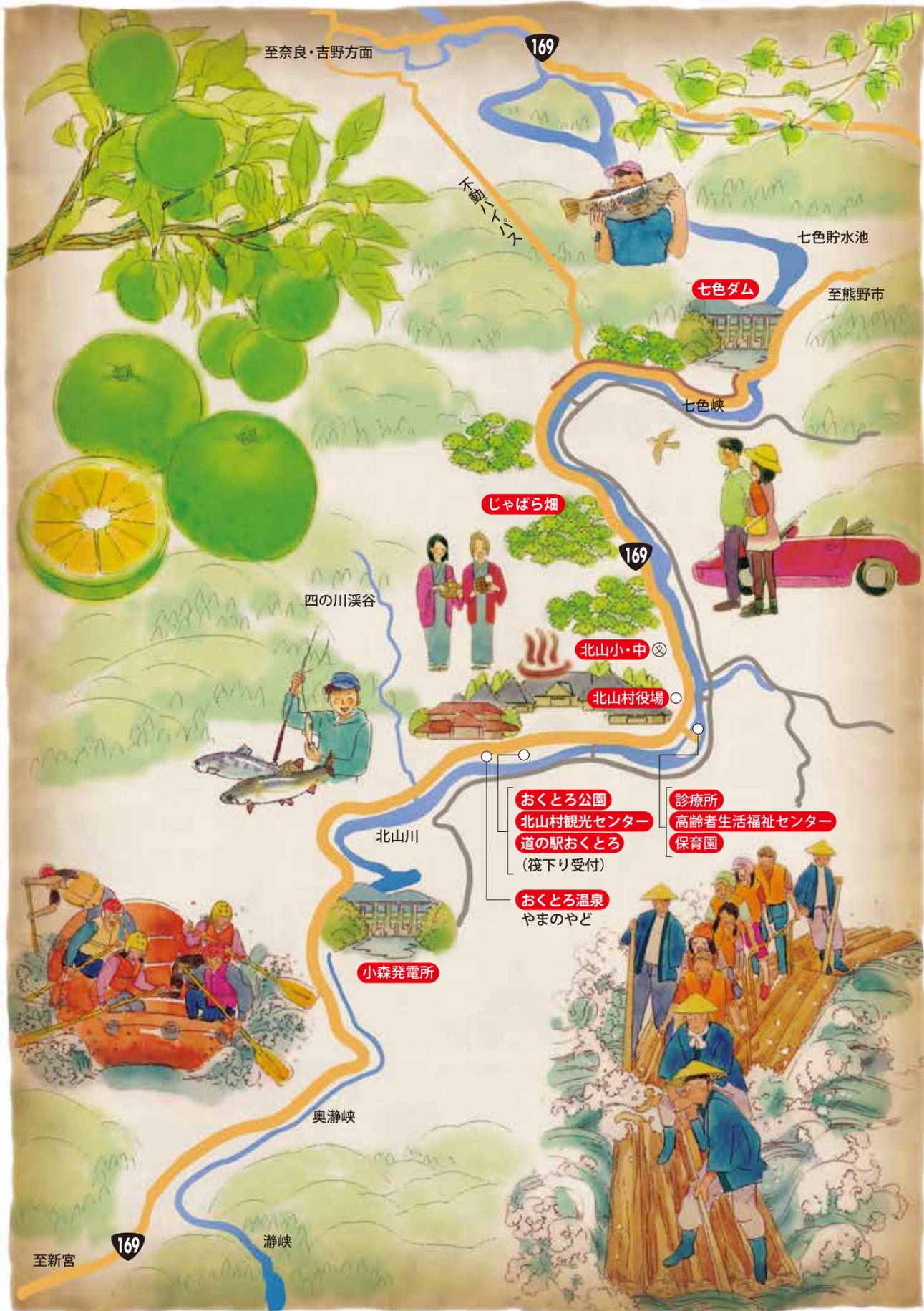
うつくしの村

春・夏・秋・冬



エメラルドグリーンの小森ダム湖に舞う桜の花びら。絵画のような美しさです。





MESSAGE



過疎に打ち勝つ村づくり

北山村長 泉 清久

北山村は、明治22年の村制施行以来130年余、全国唯一飛び地の村として今日に至っております。

平成の大合併にも単独で生きる道を選び、現在は和歌山県でただ一つの村として、高齢化も何のその村民一丸となって頑張っています。

古くは筏師と林業の村として栄え、林業者が切り出した木材を筏師が筏に組み、北山川を流して新宮市まで運んで生業を立てていました。しかし、昭和30年代から木材運搬も次第に陸送へと写り、さらに北山川の電源開発によるダム建設により、生活基盤をはじめ村の状況は大きく変革していき、筏流しも途絶えてしまいました。

400年以上も続いた筏流しを何とか復活できないか……先人は官民一体となって立ち上がりました。

昭和54年、観光振興と筏流しの伝統技術の継承を目的に、北山観光筏下りをして復活しました。

平成29年には筏流しの伝統技術が認められ、「和歌山県民俗無形文財」に指定されました。

昭和54年当時は、現在村の基幹産業である特産柑橘「じゃばら」の植栽開始、そして国道169号奥瀬道路の事業着手をはじめ北山村の変革のスタートでもありました。

奥瀬道路も、平成36年頃までには二車線化による全線開通となり、アクセスがさらに向上します。

昭和54年の変革期から40年を経て「北山村創生」に向けての、さらなる挑戦が始まります。

私もこの村で生まれ、そして村に育てていただきました。先人達が築きあげてきたことは必ず守り、村を存続させていく。そのためには過疎に打ち勝つことでもあります。

和歌山県唯一の村として、村民と共に「過疎に打ち勝つ村づくり」に取り組んで参りたいと考えております。

自然に恵まれた「うつくしの村」「青い村」北山村にぜひ来てたもれ。